

英国で伝統的に関心を持たれている植物

— Mother Goose と Shakespeare の比較 —

池 田 広 昭*

Plants Traditionally Important in Britain:
Comparison of Mother Goose Nursery Rhymes
and Shakespeare's Works

Hiroaki IKEDA

Abstract

The plants mentioned in Mother Goose nursery rhymes and Shakespeare's works have been carefully picked out and compared to discover what are the plants traditionally considered important in Britain. The plants mentioned substantially frequently in both Mother Goose and Shakespeare's works have been found out to be apple, cherry, corn, grass, lily, oak, rose, pea(se), pear, pepper, and plum. All of these have had much to do with British everyday lives and should be traditionally important.

1. は じ め に

身の回りには様々な植物が見られるがどの植物にも同じように関心があるわけではない。あたり一面に生えているのに目にも留まらず名前さえ知らない植物もある。逆に、ちょっと花が咲いただけでも世間をさわがせる植物もある。いろいろある植物が関心のあるものとそうでないものに分れるのは日常生活や伝統とのかかわりの深さに違いがあるからであろう。何が我々の意識の中心に引き入れられ何が外に取り残されるかという取捨選択こそ文化や習俗そのものと言えよう。

英国において伝統的に人の関心を集める植物はどんな植物か、Mother Goose、すなわち、英国の伝承童謡と Shakespeare の作品を通してさぐってみることにする。

2. 方 針

文学作品や民間伝承に登場する植物にはその国や土

地の人の植物に対する関心がある程度忠実に反映しているものではあるまいか。関心があっても登場しないこともあるだろうが、登場しているものについては何らかの関心があることを示すと考えてもよいであろう。どんな植物に関心を持たれているかを知るためには、単に植物名の言及の有無を調べるだけでは十分ではなく、言及の頻度も調べる必要がある。また、一作家やひとつのジャンルだけでなくできるだけ多くの資料に当たった方がよい。本稿ではその第一段階として Mother Goose と Shakespeare の作品に言及されている植物名を頻度を含めて比較する。それによってどちらか一方だけを見ていたのではわかりにくい英国人の共通項的傾向がより一層明確になるものと思う。

Mother Goose は、伝承であるからこれで全部調べ終えたということがない。したがって、範囲を限定して調べるよりほかに方法はない。そこで植物名のあるなしと頻度の両方を調べる範囲としては、Miyakawa と Toyama の *A Handbook of Nursery Rhymes*¹⁾ と Opie の *The Oxford Nursery Rhyme Book* に集録されている唄に資料を限定した。そのほか、これらに見られない植物名を調べるために Opie の *The Puffin Book of Nursery Rhymes*, Halliwell の *The Nursery*

Rhymes of England and Popular Rhymes and Nursery Tales, Folkard の *Plant Lore, Legends, and Lyrics*, 森の『英国童謡選』, 加藤の『英米文学植物民俗誌』に目を通した。これら *Puffin Book* 以下に言及されている植物については頻度を問題にせず, ただ言及の有無だけを問題にする。ただし, 大部分は頻度 1 程度である。

Mother Goose は唄であるという性格上同じ文句のくり返しが多い。したがって, ひとつの唄に登場するだけで高頻度になってしまう植物が出て来る。リフレインのために増えた頻度は真実の頻度とは言い難いので, Mother Goose については, その植物名が現れる唄の数を頻度として扱うことにする。Shakespeare にも似たような例があるが, その数も少なく大勢に影響がないので Mother Goose のような扱いはしなかった。

Shakespeare の作品の舞台設定はイングランドにとどまらず, ヨーロッパとその周辺の各地に及んでいる。しかし, 当時の旅行の困難さや情報の少なさなどを考えると, そのことは一応無視して, すべてイングランドのこととして扱ってもあまり問題はないと思われる。ただし必要があれば舞台がイングランドでないことを考慮する。

本稿では植物の種 species ではなく名を扱う。したがって, 同じ植物がいくつかの別の名で呼ばれている場合, その異名をそれぞれ別に扱うことになる。

3. Mother Goose と Shakespeare の植物の比較

Mother Goose と Shakespeare の作品に言及されている植物名のリストを Appendix にまとめておいた²⁾。

3.1. 全体的傾向

言及されている植物名の種類は Shakespeare が 222, Mother Goose が 129 で, Shakespeare のほうが 100 近く多い。しかしテキストの分量が Shakespeare のほうがかなり多い (具体的にどのくらい多いかはわからないが 10 倍はこえると思う) ので, 単純な比較はできない。両方に共通して現れる植物名は 94 である。これは Mother Goose の全植物名の 73% にあたる。全体として共通するものが多いと言ってよいであろう。

共通して現れる植物名の言及頻度も相対的に割合一致している。すなわち, Mother Goose において頻度

が高いものは Shakespeare でも高く, Mother Goose で低いものは Shakespeare でも低い傾向がある。したがって, Mother Goose と Shakespeare の作品の植物は全体的に傾向が類似している。Mother Goose のほうが現れる植物が少なく, そのうえその 73% が Shakespeare と一致しているということは, 両方に共通して現れる植物の傾向は Mother Goose の植物全体の傾向と大体一致するということである。Mother Goose の植物の特徴についてはすでに池田 (昭和 62 年) 「マザー・グースの中の植物」にまとめられており, その記述が大体そのままここでも有効である。それをここでふたたび詳細にくり返す必要はないだろう。以下に要点だけを示す。全体として英国の日常生活とつながりの深い薬用植物, 香辛料, 果物, 木の実, 野菜, 穀物 (以上, 口にのいれる植物), 木材, 牧草などの有用植物が大部分を占める。そして, このほかにあまり役に立たない雑草と花の美しい野草が少し含まれている。全般に観賞の対象となる植物が少ない。日本なら童謡や文学作品に沢山登場する花木が大変少なく, 海草はまったく出て来ない。

3.2. Mother Goose と Shakespeare の両方に共通して現れる高頻度の植物

両方に共通して現れるか否か, また, 頻度が高いか低いかだけで英国人の関心の強さを十分適確に判断できるとは思わない。しかし, なんらかのヒントは得られるはずである。ことに両方に共通していて頻度がどちらにおいてもかなり高いものは, 英国人のその植物に対する関心の強さ (「関心」には「好き」「きらい」「必要」が含まれる) を示唆していると思われる。頻度の高さは日常目に触れる機会, 話題になる機会の多さを示している。つまり, 好む好まざるとにかかわらず, あるいは, 意識的, 半意識的を問わず, 自然にそれらに言及してしまう環境にあることを意味していると考えられる。それだけ物理的にも精神的にも日常的だということである。このことはこれらの植物が言及頻度が高いからといって必ずしも好みを示すとは限らないということの意味する。いづれにしろ好ききらいに関係なくなじみの深さを表していることは確かである。

Mother Goose と Shakespeare に共通して高頻度で現れる植物名は多くない。どちらにも頻度 10 以上で現れるものは, apple, cherry, corn, grass, lily, oak, rose の 7 つだけである。頻度を 5 まで下げると pea (se), pear, pepper, plum の 4 つが加わる。これらはい

ずれも確かに英国人の関心が強い植物だと言ってもよさそうである。

意外に数が少ないので基準を頻度 2 まで下げて拾うと, barley, bean, bramble, cork, daisy, ginger, holly, ivy, malt, mustard, nut, nutmeg, oat, orange, potato, rice, rosemary, rush, rye, strawberry, thistle, thorn, violet, wheat の 24 の植物が得られる。これらもまた英国において関心の高そうな植物である。

実は基準を頻度 1 まで下げて拾っても得られる植物の英国とのかかわりの深さは変らない。これら Mother Goose と Shakespeare に共通する植物全体の傾向については 3.1. ですでに述べてある。この節では両方に共通して現れる頻度 2 までの植物についてももう少し掘り下げておく。

上に記した頻度 2 以上で共通して現れる植物の大部分は英国に自生, 帰化, 栽培のいずれかの形で生息している。これに当てはまらないものとしては第一に lily があげられる。日本で言うユリは, 英国にはまれに見られる帰化植物としてのもの以外はほとんど野性種がなくなっている輸入したものである。したがって, 昔, 日常生活で実物を見る機会は少なかったはずである。それにもかかわらず高頻度なのはキリスト教の絵画の重要テーマである受胎告知のマリア像に白ユリが必ず純潔の象徴として登場していることと関連がある。Pepper, ginger, nutmeg, cork, orange, rice も熱い国からの輸入に頼っているはずである。しかし仮にこれらのものが輸入品であったとしても, 英国人の日常生活におけるこれらの重要性は疑う余地がない。

さて, 2 回以上共通して現れる植物名を英国人とのかかわりの上から次のようにまとめた。

- 1) 英国人が一般的に花や香りが美しいとみなす植物
cherry, lily, rose, daisy, violet
- 2) 英国人に人気のある果物と木の実
apple, cherry, pear, plum, orange, strawberry, nut
- 3) 英国人の関心の強い樹木
oak, holly, ivy
- 4) 同じく低木
rose, bramble, thorn
- 5) 英国の代表的穀物
corn, pea(se), barley, bean, oat, rice, rye, wheat
- 6) 英国人の好む香辛料
pepper, ginger, mustard, nutmeg

7) 役に立つ, または, 気になる野草

grass, rush, thistle

これらのうち 5) の穀物類は好ききらいとは関係なく英国における食糧としての重要性から生ずる頻度の高さだと思う。いたるところで栽培しているのが見られ食卓にもいろいろな形で料理されて出て来るのが反映しているのであろう。なお, Rohde は corn, barley, oat, rice, rye, wheat を Shakespeare の植物名リストに入れてない。Savage も corn をリストに入れていない。また, 最も網羅的な Ellacombe でさえ, リストに入れてはいるものの, corn については説明の要なしとしている。

穀物以外のものもあまり説明を要しないようであるが, 1) と 2) を中心にいくつか選んで Mother Goose から用例を挙げながら検討してみる。(Shakespeare の用例は有名なものが多いので取り上げないことにした。)

Rose は lily と違い英国に普通に見られる野性種が数種類あり花も, 無論一重ではあるが, 比較的大輪である。したがって, 関心が持たれても不思議ではないが, Shakespeare の 103 回(damask rose, musk-rose, Provincial rose を加えれば 110 回) という言及頻度は, 2 位が corn の 37 回ということを考えれば, 異常とも言える多さである。西洋の文学的伝統を感じさせる。Shakespeare は多くの作品に rose を登場させているが, 一作品で最も言及が多いのはパラ戦争を扱った *1st Henry VI* で, 合計 19 回の言及がある。ほかはあまり偏りなくいろいろな作品に rose が登場する。美や愛, あるいは清らかさの象徴として様々な箇所では比喻として使われている。Mother Goose においても rose が好まれていることは確かなようだ。Mother Goose は童謡の常でいまひとつ意味のつかみ切れない唄が多く, rose の現れる唄も例外でないが, rose の登場回数は少なくない。パラ戦争をほのめかしたのものもある(79a)。Rose の例をいくつかあげてみよう。他の高頻度の花といっしょに登場することが多い。

The rose is red, the violet's blue,
The honey's sweet, and so are you.
Thou art my love and I am thine;
I drew thee to my Valentine.
The lot was cast and then I drew,
And fortune said it should be you.

(8)³⁾

Huff the talbot and our cat Tib
They took up sword and shield,
Tib for the red *rose*, Huff for the white,
To fight upon Bosworth field.

(79a)

Ring-a-ring o' *roses*
A pocket full of posies
A-tishoo! A-tishoo!
We all fall down.

(331a)

He promised he'd bring me a basket of posies,
A garland of *lilies*, a garland of *roses*,
A little straw hat, to set off the blue ribbons
That tie up my bonny brown hair.

(612f)

以上の例には *violet* も登場しているが, *violet* は英国に野性のものが見られ, 花の姿だけでなく香りも好まれているようだ。Shakespeare においては *rose*, *lily* について用例が多い。

果物は *apple*, *pear*, *plum* がよくいっしょにひとつの Mother Goose の唄に出てくる。これらは英国で古くから栽培されている果樹で日本の柿のようにありふれた果物である。

In the greenhouse lives a wren,
Little friend of little men;
When they're good she tells them where
to find the *apple*, *quince*, and *pear*.

(184)

Bring Daddy home
With a fiddle and a drum,
A pocket full of spices,
An *apple* and a *plum*.

(237)

There was an old woman lived under some
stairs,
He, haw, haw, hum;
She sold *apples* and she sold *pears*,
He, haw, haw, hum.

(441a)

Apple は果樹の代表としてよく季節の行事の唄に登場する。以下はその例である。

Here's to thee, old *apple tree*,
Whence thou may'st bud
And whence thou may'st blow,
And whence thou may'st bear *apples* enow;
Hats full and caps full,
Bushels full and sacks full,
And our pockets full too.

(4)

Shakespeare が *apple* の品種を表わす語を数多く登場させているということも記しておく必要があるだろう。すなわち, *apple*-John, *crab*, *codling*, *leather-coat*, *pippin*, *pomewater*, *sweeting* である。英国が *apple* の本場であるということを裏付けるかのごとくである。

Oak は日本人の杉とは分類的には近くないが, 英国においては日本の杉のようにありふれた木で神木として崇められるばかりでなく実用にもなる。

A wise old owl sat in an *oak*,
The more he heard the less he spoke;
The less he spoke the more he heard.
Why aren't we all like that wise old bird?

(888)

3.3. Mother Goose にだけ現れる植物

Mother Goose と Shakespeare に共通していないからといってその植物が英国人にとって関心がないと決め付けることはできない。この点慎重でなければならない。Mother Goose だけに現れる植物を一通り検討しておく。

現在伝わっている Mother Goose の唄 (少なくともその現在の字句) の大部分は成立したのが Shakespeare より新しいと考えられている。したがって, Shakespeare の言及している植物はすべて Mother Goose に登場する可能性がある。だが, Shakespeare の作品には Shakespeare 以降に英語に入った植物名は現れ得ない。Mother Goose だけに現れる植物名のうち, *coffee*, *hickory*, *tea* は Shakespeare の生存中にはまだ英国には入って来ていなかったもので Shakespeare の作品には登場し得ない。

Tea は 1610 年にオランダ人によって初めてヨーロッパに持ち込まれ, イングランドに到達したのは

1644 年である。

Coffee がヨーロッパにもたらされたのは 16 世紀中葉だが、ロンドンに入ったのは 1652 年が最初である。

Hickory は北米原産で 17 世紀に英国に入り、文献に登場するのは 1653 年からである。

Tobacco も Shakespeare の作品に言及がないが、ヨーロッパで最初に喫煙が始められたのは英国であり、1586 年にアメリカ大陸から Ralph Lane が Sir Francis Drake とともにもたらしたのが初めてである。Shakespeare が生きていた頃はおそらくまだ喫煙習慣が世間に広まっていなかったと思われる。

Shakespeare には pumpkin の用例がなく、替りに pumpion という語の用例が 2 例程あるがこれが今の pumpkin の古形である。Pumpkin という語の文献初出は OED によれば 1647 年である。

また、buttercup という語も Shakespeare の頃は使われておらず別の名で呼ばれていたと考えられている。

Appendix のリストでは gilly-flower は Shakespeare が言及していないことになっているが、gilly-flower とは gillyvor のことであり、Shakespeare の作品の edition の違いによっては gilly-flower の形が採用されているものもある。

これら以外の Mother Goose にだけ登場する植物名は Shakespeare の頃すでに英語の語彙として存在していたことが確認できる。したがって、Shakespeare の作品に登場し得たが、登場するに至らなかった。

英国人の関心という点から見た場合、tea, coffee, hickory, tobacco は頻度もそれぞれ 10, 4, 2, 2 と、2 以上であるから関心ありと判断しても矛盾しない。Pumpkin は pumpion とみなしてよいのでやはり関心があるという扱いになる。これら以外にも Mother Goose にしか現れない植物として sage, cinnamon, cotton, barberry, buttercup, collyflower, elecampane, fir, groundsel, kail (or kale), may, melon, sorrel, spinach, wineberry, yarrow などがあるがいずれも英国においては日常的で特殊性のないものばかりである。これらは本稿の基準には合致しないが英国人にとって関心が薄いと速断することはできない。

3.4. Shakespeare の作品にだけ現れる植物

Mother Goose に現れず Shakespeare の作品にだけ言及されている植物が 117 ある。大部分は頻度が低

いが一部高いものが混っている。Mother Goose の場合と同様、検討をする。

Shakespeare にだけ登場する植物名のうち頻度 5 以上のものは, balm, burr, cowslip, crab, flax, flower-de-luce, grape, husk, medlar, myrtle, osier, pine, plantain, prune, reed, sedge, vine である。このうち, burr, cowslip, crab, flax, husk, medlar, myrtle, osier, plantain, prune, reed, sedge はいろいろな点から考えて Mother Goose に登場してもおかしくない植物だと思う。調べる Mother Goose の唄が増えればそこに見つかる可能性がある。Balm は芳香性の薬草と思われるが少し特殊性があるようだ。同定が確定しておらず明確にどういうものなのかわからない。しかし、どうも東方からの輸入品のようであり、Shakespeare としては好きだったのかも知れないが、一般には行きわたっていなかったのではなかろうか。Grape と vine はブドウの実と木のことだが、英国はブドウの生育に適していない。Shakespeare はギリシア・ローマ神話との関連から、また、wine との関連から意識していたのであろうが、民間伝承である Mother Goose には民衆が実際に実物を目にする機会がなかったために登場して来なかったのであろう。Pine も英国、特にイングランドにとってはあまり一般的な木とは言えないから Mother Goose に現れていないのはそのためであろう。

頻度 4 以下の植物名に目を移すと、多少の特殊性が現れている。これらの植物名の中には植物の異名が沢山含まれている。当時世間に定着していた語彙ではなく Shakespeare 流の詩的言い換えやほのめかしが混っていて、同定に関して専門家の見解が一致していないものが残っている。中には植物名と言えない、あるいは、言わないほうがよいと思われるものもある。それらの異名を列挙すると (何を指すかは Appendix 参照), balm, balsamum, balsom, bay, bell, Benedictus, bulrush, cod, cuckoo-bud, cuckoo-flower, Cupid's flower, dead men's finger, Dian's bud, fico, fig, figo, filbert, flag, fumiter, fumitory, goss, herb of grace, honey-stalk, insane root, laurel, love-in-idleness, mandragora, mandrake, Mary-bud, narcissus, pansy, purple, spear-grass などである。このうち, Cupid's flower, dead men's finger, Dian's bud, honey-stalk, insane root は植物名というよりは文学的のほめかしの性格が強い。また, bell と cod は Shakespeare 独自の省略形であり一般的でない。Cuckoo-bud と

cuckoo-flower は現在のところ同定が確定していないが buttercup もしくは cowslip あたりではないかと推測されている。しかし、あるいはこれもほのめかしであり定着した植物名でなかった可能性もある。これら少し特殊性のある植物名の使用と、そもそも異名を多用するという特徴は、英国人に共通の関心というより作家独自の個性を表すと言ったほうがよい。

頻度の低いものの中には別の意味で特殊な植物群がある。すなわち、民間療法、魔術、まじないで使う薬草や毒薬である。詳しい説明は省略して名前だけを列举すると、aconitum, aloe, balm, balsamum, balsom, Benedictus, camomile, colocintida, Cupid's flower, Dian's bud, eringo, hemlock, herb of grace, hip, holy-thistle, hyssop, insane root, kecksy, love-in-idleness, mandragora, mandrake, mistletoe, pansy, rhubarb, saffron, samphire, savory, senna, toadstool, vetch などがこれにあたる。これらは妖しい雰囲気や陰鬱さをかもし出すのに適当なものばかりである。この中には一般的な植物もあるにはあるが、全体として英国人全般というより Shakespeare 個人の興味関心を示すと考えたほうがよいであろう。

4. お わ り に

現在、英国の公園や畑、民家の庭や窓辺には様々な植物が見られる。しかし、それらの中で昔から関心を持たれていた英国的植物はどれなのか、その問いに対する解答を得るための第一歩として Shakespeare の作品と Mother Goose の唄に登場する植物を比較してみたわけである。その一応の結果は 3.2. に提示されている通りである。無論これだけでは到底十分とは言えないが、英国で伝統的に関心を持たれている植物を知るひとつのヒントにはなると思う。

さて、本論ではまったく触れることができなかったが Mother Goose と Shakespeare の植物は季節感に乏しい。Ellacombe も指摘しているように⁴⁾ Shakespeare の言及している植物には季節感と結びつかないものが大変多い。Mother Goose も同様の傾向を示す。とかく季節感あふれるところばかり集中的に選び出されて目立つ取り扱いを受けるので違う印象を受け易いが、実際は、季節と関係のない箇所のほうが何倍も多い。また、Mother Goose も Shakespeare も動物に対する言及のほうが植物よりはるかに多いということも忘れてはならない。動物に対する関心も強いので

ある。

さらに、Shakespeare の植物を論ずる場合、作品毎の植物の分布の偏りを無視できないのだが、本稿ではほとんど触れることができなかった。

註

- 1) 詳しくは参考文献参照。以下同様。
- 2) 池田「マザー・グースの中の植物」と池田「Shakespeare の言及している動植物名」の植物名リストを、基準を後者に統一し、若干の修正と増補を加えてまとめたものである。
- 3) Shakespeare の植物名リストは過去いろいろ発表されているが内容に少しずつ異同がある。単純ミスと思われるものもあるが、植物の規定の仕方(定義)の違いが異同の生ずる主たる理由である。Appendix において採用している植物拾い出しの規準は池田「Shakespeare の言及している動植物名」を参照のこと。
- 4) 与えられている Mother Goose の番号は Miyakawa と Toyama の *A Handbook of Nursery Rhymes* の唄番号を示す。以下についても同様。
- 4) *The Plant-Lore and Garden-Craft of Shakespeare* の Appendix II 参照。

参 考 文 献

- Opie, Iona and Peter. *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*. Oxford: Oxford University Press, 1984.
- . *The Oxford Nursery, Rhyme Book*. Oxford: Oxford University Press, 1985.
- . *The Puffin Book of Nursery Rhymes*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd, 1986.
- Miyakawa, Yoshihisa and Shigehiko Toyama. *A Handbook of Nursery Rhymes*. Tokyo: Kenkyusha, 1985.
- Halliwell-Phillipps, James Orchard. *The Nursery Rhymes of England, Obtained Principally from Oral Tradition* (third edition). Detroit: Reissued by Singing Tree Press, Book Tower, 1969. (Originally published in London, 1843).
- Halliwell, James Orchard. *Popular Rhymes and Nursery Tales: A Sequel to the Nursery Rhymes of England*. London: John Russell

- Smith, 1849.
- Baring-Gould, William S. and Ceil. *The Annotated Mother Goose*. New York: Clarkson N. Potter, Inc./Publishers, 1962.
- Schmidt, Alexander, *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* (third edition revised and enlarged by Gregor Sarrazin). New York: Dover Publications, 1971.
- Spevack, Marvin. *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Georg Olms Verlag: Hildesheim, 1973.
- Evans, G. Blakemore ed. *The Riverside Shakespeare*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1974.
- Seager, H.W. *Natural History in Shakespeare's Time*. Chicheley: Paul P.B. Minet, 1972.
- Rydén, Mats. *Shakespearean Plant Names: Identifications and Interpretations*. Stockholm: Amqvist & Wiksell International, 1978.
- Rohde, Eleanor Sinclair. *Shakespeare's Wild Flowers, Fairy Lore, Gardens, Herbs, Gatherers of Simples and Bee Lore*. London: The Medici Society, Ltd., 1935.
- Ellacombe, Rev. Henry N. *The Plant-Lore and Garden-Craft of Shakespeare* (second edition). London: W. Satchell and Co., 1884.
- Savage, F.G. *The Flora and Folk Lore of Shakespeare*. London: Ed. J. Burrow & Co. Ltd., 1923.
- Dyer, T.F. Thiselton. *Folk Lore of Shakespeare*. London: Griffith & Farran, 1883.
- Folkard, Richard. *Plant Lore, Legends, and Lyrics* (second edition). London: Sampson Low, Marston & Company, Limited, 1892.
- Field Guide to the Wild Flowers of Britain*. London: The Reader's Digest Association, 1985.
- Field Guide to Trees and Shrubs of Britain*. London: The Reader's Digest Association, 1985.
- Norman, Jill. *The Complete Book of Spices*. London: Dorling Kindersley Limited, 1990.
- Bailey, Adrian ed. *Pocket Encyclopedia of Cook's Ingredients*. London: Dorling Kindersley Limited, 1991.
- The Oxford English Dictionary*. Oxford: The Clarendon Press, 1970.
- Wright, Joseph ed. *The English Dialect Dictionary* (reprint). Tokyo: Oxford University Press, 1981.
- Brewer's Dictionary of Phrase and Fable* (14th edition). London: Cassell Publishers Ltd, 1989.
- 平野敬一著『マザー・グースの唄—イギリスの伝承童謡』(中公新書)中央公論社, 昭和47年.
- 渡辺 茂編著『マザー・グース事典』北星堂書店, 昭和61年.
- 藤野紀男著『マザー・グースのカレンダー 唄でつづる12ヵ月』原書房, 1988年.
- 谷川俊太郎訳, 和田誠絵, 平野敬一監修解説『マザー・グース』(1~4)(講談社文庫)講談社, 昭和56年.
- 森 一編訳『英国童謡選』千城, 昭和61年.
- 小田島雄志訳『シェイクスピア全集』(全37巻)(白水Uブックス)白水社, 1983~'89年.
- 安倍 薫著『シェイクスピアの花』八坂書房, 1979年.
- 金城盛紀著『シェイクスピア花苑』世界思想社, 1990年.
- 藤野豊吉著『シェイクスピア薬品考』八坂書房, 1979年.
- P・ミルワード著『イギリス風物誌』(スタンダード英語講座11)大修館書店, 1985年.
- 成田成寿編集『英語歳時記 普及版』研究社出版, 1983年.
- 加藤憲市著『英米文学植物民俗誌』富山房, 昭和54年.
- 井上義昌編『英米故事伝説事典』富山房, 1988年.
- 池田広昭「マザー・グースの中の植物」(『幾徳工業大学研究報告』A-11, 昭和62年).
- 池田広昭「Shakespeareの言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-16, 平成4年).

Appendix

〈Mother Goose または Shakespeare の作品に現れる植物名〉

次に示す植物名のリストは池田「マザー・グースの中の植物」と池田「Shakespeareの言及している動植物名」に載せてあるリストを修正増補してまとめたものである。両者における植物名拾い出しの規準の違いを後者に統一した。

数字は頻度を表すが、Mother Goose に関してはその植物名の現れる唄の数とのべの使用回数の両方を示した。()でくくってある方がのべの回数である。唄の数とのべ数が一致しているときは()は省略した。Mother Goose における頻度は本文中に述べてあるように Miyakawa と Toyama の *A Handbook of Nursery Phymes* と Opie の *The Oxford Nursery Rhyme Book* に集録されている唄だけを対象にしている。これら以外(具体的には本文参照)に見られる植物名は、頻度を数えず(ただし、用例数は大部分1である)、用例があるということだけを+の記号で示した。用例のないものに関しては、Shakespeare についてはわかり易いように-で示したが、Mother Goose のほうは他の資料に用例がある可能性もあることを考慮して空欄にしておいた。*は Mother Goose と Shakespeare の作品の両方に言及のあることを示す。

	Mother Shake- Goose speare	
aconitum (ヨウシュ) トリカブト		1
*acorn ドングリ	1	5
almond アーモンド		1
aloe アロエ		1
*apple リンゴ	37 (54)	14
apple-John リンゴの一種		4
apricock アンズ		3
*ash (セイヨウ) トネリコ	4 (5)	1
*aspen (ヨーロッパ) ヤマナラシ	+	2
aul ハンノキ	+	-
balm セイヨウヤマハッカ		27
balsamum balm のこと		1
balsom balm のこと		1
barberry メギ	1	-
*barley オオムギ	6	2
*barm 酵母	1 (2)	1
bay ゲッケイジュ		3
*bean 豆, ソラマメ類	4 (5)	2
bell harebell のこと		1
Benedictus オオアザミ		4
*berry 液果, 漿果	1	11
bilberry コケモモ		1
*birch カンバ	+	2
blackberry ブラックベリー		3

	Mother Shake- Goose speare	
blaeberry bilberry の別形	+	-
blue ヤグルマギク		1
bour-tree elder のこと	+	-
box ツゲ		1
*bramble blackberry 類のキイチゴ	3	2
*briar (or brier) イバラ, 野バラ	1 (2)	17
*broom エニシダ	2 (5)	1
bulrush ホタルイ, ガマ		1
burnet ワレモコウ		1
burr burr-dock のいが		6
burr-dock ゴボウ		1
buttercup ウマノアシガタ	1 (2)	-
button ボタン形の花		1
*cabbage キャベツ	1 (4)	1
camomile カモマイル		1
canker dogrose のこと		4
*caper セイヨウフウチョウボク	1	1
caraway ヒメウイキョウ		1
*carrot ニンジン	1	1
*carnation カーネーション	+	1
*cedar ヒマラヤスギ	+	16
*chaff 粃穀	1	12
*cherry サクランボ	11 (19)	14
*chestnut クリ	1	4
cinnamon シナモン	+	-
*clove チョウジ	1	1
*clover クローバー	5	1
*cockle ムギセンノウ, ドクムギ	+	2
cod 豆のさや		1
codling 熟してないリンゴ		1
coffee コーヒー	4 (5)	-
collyflower カリフラワー	1	-
coloquintida コロシントウリ		1
columbine オダマキ		2
*cork コルク	3 (4)	3
*corn 穀物, 特に wheat	18 (19)	37
cotton ワタ	2 (3)	-
cowslip キバナノクリンザクラ		7
crab 野生リンゴの一種		12
crow-flower 同定未解決		1
crown-imperial ヨウラクユリ		1
cuckoo-bud 同定未解決		1

	Mother Shake- Goose speare			Mother Shake- Goose speare	
cuckoo-flower 同定未解決		1	goss ハリエニシダ		1
Cupid's flower pansy のこと		1	gourd ウリ		1
*currant 干ブドウ, フサスグリ	2 (5)	2	grape ブドウ (の実)		15
*cypress イトスギ	+	3	*grass イネ科の植物	11 (12)	29
Daffy-down-dilly daffodil のこと	1	—	groundsel ノボロギク	+	—
daffodil ラッパズイセン		3	harebell ヘアベル		1
*daisy デイジー	3 (4)	6	*hawthorn サンザシ	1	8
damask rose ダマスクバラ		3	*hazel セイヨウハシバミ	1	4
damson インシチチアスモモ		1	heath ヒース		3
darnel ドクムギ		3	hebenon 同定未解決		1
date ナツメヤシ		4	hemlock ドクニンジン		3
dead men's fingers purple のこと		1	*hemp アサ, タイマ	1	6
dewberry デューベリー		1	herb of grace (or grace) rue のこと		4
Dian's bud Artemisia, or Chaste Tree		1	hickory ヒッコリー	2 (3)	—
dill イノンド	+	—	hip 野バラの実		1
*dock ギンギシ, スイバ	1 (2)	2	*holly セイヨウヒイラギ	2 (6)	2
dogberry セイヨウミズキ		1	holy-thistle オオアザミ		1
*ebony コクタン	1 (2)	6	honey-stalk clover のこと		1
eglantine エグランタイン		2	honeysuckle スイガズラ		3
*elder (セイヨウ) ニワトコ	+	6	husk 穀, さや, 皮		5
elecampane エリカンペイン	1	—	hyssop ヒソップ		1
*elm (ヨーロッパ) ニレ	+	3	insane root ヒヨスカ?		1
eringo ヒゴタイサイコ		1	*ivy キヅタ	4 (18)	6
fennel ウイキョウ		3	kail (or kale) チリメンキャベツ	1	—
*fern シダ	+	2	kecksy hemlock の乾燥した実		1
fico fig のこと		1	knot-grass ミチヤナギ		1
*fig イチジク	1	11	lady-smock ハナタネツケバナ		1
figo fig のこと		2	larks'-heel ヒエンソウ		1
filbert セイヨウハシバミ		1	laurel ゲッケイジュ		4
fir モミ	1	—	*lavender ラベンダー	2 (5)	1
flag アイリス, キショウブなど		1	leather-coat リンゴの一種		1
flax アマ		7	*leek リーキ, ニラネギ	+	18
flower-de-luce ユリ, アイリス		5	*lemon レモン	1	1
fumiter fumitory の別形		1	lettuce レタス		1
fumitory カラクサケマン		1	*lily ユリ	8 (12)	27
*furze ハリエニシダ	+	2	line シナノキ		2
*garlic ニンニク	+	5	locust イナゴマメ		1
gilly-flower ジャコウナデシコ	+	—	love-in-idleness pansy のこと		1
gillyvor gilly-flower の別形		2	mace メース		1
*ginger ショウガ	3	9	mallow ゼニアオイ		1
*gooseberry グースベリー	+	1	*malt 麦芽	2 (12)	5
			mandragora マンドラゴラ		2

Mother Shake- Goose speare			Mother Shake- Goose speare		
mandrake	mandragora のこと	4	plane	ブラタナス, スズカケノキ	1
*marigold	マリーゴールド	1	plantain	オオバコ	6
marjoram	マヨラナ	4	*plum	セイヨウスモモ	20 8
Mary-bud	marigold のこと	1	pomegranate	ザクロ	3
mast	ブタの食べるドングリ	1	pomewater	リンゴの一種	1
may	hawthorn のこと	3	*poppy	ヒナゲシ	1 1
medlar	セイヨウカリン	7	poprin	pear の一種	1
melon	メロン	1	*potato	ジャガイモ	4 2
mildew	白カビ	2	*primrose	サクラソウ	1 9
mint	ミント, ハッカ	2	Provincial rose	プロバンサル・ロー	
mistletoe	ヤドリギ	1	ズ		1
*moss	コケ	1	prune	乾燥した plum	7
*mulberry	クワ	+	pumpion	カボチャ	2
*mushroom	キノコ	+	pumpkin	カボチャ	3 (5) -
musk-rose	ヤマイバラ	3	purple (or long purple)	シラン	1
*mustard	カラシ	2	quicken	rowan のこと	+
myrtle	ギンバイカ	6	quickset (hedge)	hawthorn (の生垣)	-
narcissus	daffodil のこと	1	*quince	マルメロ	1 1
*nettle	イラクサ	1	radish	ラディッシュ	2
*nut	堅果, 木の実	3 (4)	raisin	干ブドウ	1
*nutmeg	ナツメグ	2	ramson	garlic のこと	+
*oak	オーク	11 (13)	reed	アシ, ヨシ	9
*oat	カラスムギ	2	rhubarb	ダイオウ	1
*olive	オリーブ	+	*rice	イネ, コメ	2 2
*onion	タマネギ	1	*rose	バラ	17 (21) 103
*orange	オレンジ	2 (3)	*rosemary	ローズマリー	2 (9) 7
osier	ヤナギ	5	rowan (or roan)	ナナカマド	+
oxlip	オックスリッパ	3	*rue	ヘンルーダ	+
*palm	ヤシ	+	*rush	イグサ	2 20
pansy	パンジー	1	*rye	ライムギ	2 3
*parsley	パセリ	2 (9)	saffron	サフラン	4
parsnip	パースニップ	2	sage	セージ	3 (10) -
*pea(se)	エンドウ	5 (10)	St. John's wort	オトギリソウ	+
*peach	モモ	1	samphire	クリスマム属	1
*pear	セイヨウナシ	11 (21)	savory	セイボリー	1
*pepper	コショウ	5 (8)	sedge	スゲ	7
pig-nut	ピーナット類	1	senna	センナ	1
*pimpernell	ルリハコベ	+	sorrel	スイバ	1 -
pine	マツ	12	spear-grass	長葉の单子葉類	1
*pink	ナデシコ, セキチク	+	spinach	ホウレンソウ	1 (14) -
piony	marsh-marigold のこと?	1	squash	未成熟の豆のさや	3
*pippin	ビッピン, リンゴの一種	1			

	Mother Shake- Goose speare			Mother Shake- Goose speare	
*strawberry イチゴ	3	4	vetch カラスノエンドウ		1
sweeting リンゴの一種		1	vine ブドウ(の木)		20
sycamore エジプトイチジク		3	*violet スミレ	3	18
tea チャ	10 (13)	—	*walnut クルミ	1	2
*thistle アザミ	3 (10)	3	warden ウォーデン		1
*thorn イバラ	4 (5)	25	*wheat コムギ	2	11
*thyme タイム	1 (8)	3	*willow ヤナギ	+	28
toadstool 毒キノコ		1	wineberry ウラジロイチゴ	1	—
tobacco タバコ	2	—	*woodbine スイカズラか?	1	3
tulip チューリップ	+	—	*wormwood (ニガ)ヨモギ	+	5
*turnip カブ	4 (5)	1	wort アブラナ属		1
Venus' tree ギンバイカ	+	—	yarrow セイヨウノコギリソウ	1	—
vervain (or vervine) クマツヅラ	+	—	*yew イチイ	+	6